
ジリとキリカ

松本 りょう子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジリとキリカ

【Nコード】

N8042L

【作者名】

松本 りょう子

【あらすじ】

お互いが自転車を通える距離に住む、ジリとキリカの物語。独特の感性を持ったキリカと、その言動に時に驚き、時に戸惑いながらも一緒にいるジリの、可笑しくて少し切ない日常の風景。

ジリとキリカ

ジリが山手通りを自転車で飛ばしている頃、キリカは水を張ったバスタブに腰まで浸かってぼんやり天井を見上げていた。

「ジリのヤツ遅いなあ。」

ジリは山手通りを右折して、かむろ坂を登り始めたところだった。
「あつつい！あつつい！」

八月八日晴れ。ジリのＴシャツはすでに汗でびっしょりだった。坂を登って二つ目の角を曲がるとキリカのアパートが見えてくる。喪服姿の集団が前からゾロゾロとやって来たので、ジリは自転車を降りて歩くことにした。近くに斎場があるため、この辺りに来るによく喪服姿の人と擦れ違ふ。自転車を降りて歩くと更に熱い。
(キリカんちでシャワー浴びよう。)

ジリは自転車を引きながらキリカのアパートまで歩いた。

キリカの部屋は二階の一番奥だ。インターホンを続けて三回押したが予想通り返事はなかった。ジリは仕方なくいつものように合鍵でドアを開けた。

「おーい！キリカ、いるんだろ。」

けれど返事はない。ジリは諦めて部屋に上がったがキリカの姿は無かった。ふと思いついてジリは風呂場を覗いてみることにした。

風呂場のドアを開けるとそこにキリカが居た。

「遅かったじゃないの。一時に来るって言わなかった？」

ジリは一瞬固まったがすぐ我に返ってキリカに聞いた。

「お前：何で服着たまま風呂入ってるの？」

するとキリカは「風呂じゃないわよ。水風呂よ。」と平然と言った。

「水とかお湯とかの問題じゃないだろ…」

ため息混じりにジリがそう言くと、キリカは「何でって、決まってるじゃない。あんたのその顔が見たかったからよ。」とあたりまえのように言ってニコリと笑った。

「おかげですっかり冷えたわよ。ジリも入る？」

楽しそうにキリカは言う。ジリも諦め「…そうだな…驚いてすっかり汗も引いたけど、入るか。」とＴシャツを脱ぎ始めた。

するとキリカが「あー脱いじゃダメよ。そのまま、そのまま。」と言った。

ジリは驚いて「なんでだよ、オレはいいだろ。」と言った。

「たまにはいいじゃない、服着たまま入るとなんか自由よ!。」

ワケの分からないキリカの言葉にジリは言い返す気力も失せ、仕方なくそのまま水風呂に浸かるのであった。

「ね、自由でしょ?。」

「…ああ、そうかもな…」

カバとキリカ

その日ジリはキリカの部屋の近所の居酒屋で、キリカと一緒に夕食がてらビールを飲んでいた。

近くに住む常連客が集まる、気取りの無い賑やかな店だ。

「なあ、キリカ一緒に住まないか？」

アルコールの勢いもあって、ジリは唐突にキリカに切り出した。

「なんで？」

そんなジリの質問にもキリカはチューハイを傾けながら、表情も変えずに問い返した。

「あたしカバより大きなイビキをかくのよ。」

「・・・カバってイビキかくのか？」

「そりゃあ、あんなに大きいんだもの。イビキだってかくでしょ。」

ジリはそういう問題じゃないと思ったが、キリカはお構い無しに続けた。

「それにね、あたし夜中に原稿用紙二枚分くらいの寝言を言うの。」

ジリはそれに耐えられるの？」

「ホントに・・・？」

するとキリカは笑いながら「あはは。まっさか。原稿用紙二枚分寝言を言うことに気づいてたら、それってもう寝言じゃないでしょ。」と悪びれもせずと言った。

つまりはジリは遠まわしに断れたわけだ。

しかしキリカはその後も話し続けた。

「でもね、あたしこの間『カバの肉って食べられるの！？』って言う自分の寝言で起きたの。」

「・・・へえ。きつと変な夢を見てたんだね。」

「ううん。違うわ。」

妙に確信に満ちた表情でキリカは話し始めた。

「それはね、あたしの前世の記憶なの。」

「何？・・・前世・・・？」

「あたしの前世の前世の前世のあたしがね、石器時代にいるわけよ。」

「・・・。。。」

ジリはいつものように、また話がおかしな方向へ行ってるなと思いつつ、取り合えず黙って聞く事にした。

「それでね、あたしが温泉に入ってる・・・」

「ちょ、ちよつと待って。石器時代に温泉があるわけ？」

「もちろん。マンモスの骨を埋めようとして、地面を掘ってたら温泉が出たの。」

「・・・あ、そう。」

「それでね、あたしが気持ち良く温泉に浸かっていると、どこからともなくドスドスという音が聞こえてくるわけ。」

「・・・。。。。。」

「ふと顔を上げると、遠くから一直線に大きなカバが走ってくるのよ。」

「・・・カバが？どうして？」

「きつとカバは温泉が大好きで、その匂いを遠くから感じたのね。」

「・・・ふーん。」

「それでね、あたしはびっくりしちゃって、ただ近づいてくるカバのことは見ているしかなかったの。でも近くにいたお父さんがね・・・」

「お父さん？」

「そう、石器時代のあたしのお父さんがね、『あぶない！』ってそ

ばにあつた大きな石を持ち上げて、あたしに近づいて来てるカバに向かつて投げたの。」

「・・・それで？」

「見事その石はカバに命中して、カバはドスンと音を立てて倒れたのね。それで何だかあたしはカバの事が急にかわいそうになっちゃって、お父さんに『ねえ、このカバどうするの？』って聞いたの。そしたらお父さんが『今日の晩ご飯に今から腹を裂いて焼くんだよ』って言ったの！そこであたしはお父さんに『カバの肉って食べられるの！？』って聞くわけよ！」

満足げなキリカの顔を見ながらジリは何か「・・・よくそんな妄想が思いつくね・・・。」と言った。

「妄想？違うわよ。これは本当にあつたことなの。前世の前世の前世の前世のあたしがね、夢の力を借りて現代のあたしに太古の記憶を思い出させたんだと、あたしは思うわ。」

ジリは一体何の話をしていたんだっけと思いながら、ビールのお代わりを頼んだ。

キリカはしばらく一人何か納得した様子でいたが、突然

「ねえ、あたし砂肝もう一本頼んでもいい？ジリはいる？」と聞いてきたので、ジリはいらないと答えた。

「それじゃあ、お兄さん！砂肝三本下さい！」

「え？一本って言わなかった？」

「うん。言葉のあやよ。」

アヤ？

ジリは、絶対言葉の使い方間違ってるよなあと思いながら、冷たいビールを流し込んだ。

それから一時間ほどして、ほどよく酔った二人は居酒屋を出て、

キリカのアパートへと向かっていた。

気がつくとはや小さな声で、キリカが歌を口ずさんでいたのでジリは「何の歌？」と聞いてみた。

キリカは何で分からないの？とでも言うようなキョトンとした顔で「西島三重子の『池上線』をJAZZ風に歌ってんのよ。」と言っ
て続きをまた歌い出だした。

ジリにはその歌が、まるでJAZZにも『池上線』にも聴こえなかったが、キリカがとても楽しそうに歌っていたので、敢えて何も言わないことにした。

それからジリは、ご機嫌なキリカを部屋まで送り、キリカのアパートの下にとめてあった自転車で、自分の家まで帰った。

部屋に帰ったジリは、冷蔵庫から冷えた麦茶をグラスに入れて飲み、服を着替えて布団に潜り込んだ。

キリカはもう眠ったかな。今日はどんな時代に行っているのだろうとジリは思った。

何にしてもいい時代だといい。

温泉に浸かったカバのイビキを遠くに聞きながら、間も無くジリも眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8042l/>

ジリとキリカ

2010年10月8日12時16分発行